社会学部報
第四号
2021

—

新型コロナウイルス感染症特別号

立教大学社会学部

社会学部報
第四号
2021

—

新型コロナウイルス感染症特別号

はじめに

「思考実験」という言葉がある。
現実には実験のできない事象について、
頭の中だけで突き詰めて考えていくものだ。

もしも、全てのコミュニケーションが
インターネットで完結する社会になったら。
もしも、自由に移動する権利が制限される社会になったら。
もしも、職場に出勤しなくても良い社会になったら。
これらは全て、「思考実験の中での社会」……のはずだった。

大切な人の生命を脅かし、時に奪い、
医療従事者に苦労を強い、経済に大打撃を与え、

あらゆる我慢を強いてきたこの疫病が、
唯一残しているものが、この特殊な「社会」なのだとすれば、
社会学の視座に立つ私たちは、
この社会をただ悲観して過ごしているだけの
存在になってはならないだろう。

今の社会になってさえ、
大切だとされる普遍の価値とは何か……。
今の社会だからこそ、
考えなければならない課題とは何か……。
今の社会のうちに、
未来に繋がる「人類の集合知」を集めることはできるか……。

たとえこれらに答えが出せないとしても、
今この社会を記録し、記憶しておくこと
そのものにも価値があると信じている。
私たちが集めたこの記録を、
読者の皆様に記憶しておいていただきたいと切に願う。

目次

はじめに 06

1 コロナ禍での授業 09
現代文化学科 1年 寺坂朋佳さん 10
社会学科 1年 中村丹音さん 12

コラム1 - 学内のコロナ対策 14

2 コロナ禍での就活 15
メディア社会学科 4年 山田瑞季さん 16
メディア社会学科 4年 平野亜海さん 18
メディア社会学科 4年 齋藤まなさん 20

コラム2 - 愛すべき立教の食堂 22

3 コロナ禍での留学 23
現代文化学科 4年 中村洸太さん 24
社会学科 4年 小宮知佳さん 28

コラム3 - 編集部員による繋げ作文 32

4 コロナ禍でのゼミ運営 33
メディア社会学科 林怡瘦先生 34
現代文化学科 小泉元宏先生 37
社会学科 吉澤夏子先生 41

編集後記 44

※学年表記等は2020年度の情報に基づくものです

1

interview

コロナ禍での授業

コロナの影響で急遽始まったオンライン授業に混乱された方も多いのではないでしょうか。
そこで、1年生の2人に、オンライン授業についてどう捉えたかを聞きました。

授業
インタビュー

1

現代文化学科 1年 寺坂朋佳さん

オンライン授業の感想

私はオンライン授業を受け、安定した大学生生活が送ることができてよかったと感じています。なぜなら、大学一年生という全く新しい環境に身を置いて過ごす期間を自宅にいながら過ごすことができたからです。私は地方出身で去年の4月から一人暮らしをして大学生活を送る予定でした。立教大学への進学を決めた後、初めての一人暮らし、大学生生活との両立することへの不安がありました。しかし昨年3月に全面オンライン化が決定し、実家から全ての授業を受けることができたため、初めての大学の授業で不安なことがあった場合でも家族が支えてくれたことは、私にとって非常に有難いと感じました。

緊急事態宣言が解除された後上京しましたが、その頃にはすでにオンライン授業に慣れた状態だったため、新生活の準備に時間を費やすことができとても有意義な一年間を過ごせたと感じています。

オンライン授業でカメラオンのタイミング、心境、苦労

私は大学に入学し初めて受けた授業が英語ディスカッションの授業でした。事前のお知らせで、授業はカメラをオンにして進める、と知っていたため緊張はしましたが、カメラをオンにすることに抵抗などはあまりありませんでした。また、特に英語科目の先生は授業が始まるとすぐに「カメラをオンにして」と指示を出してくださるので、1ヶ月過ぎたあたりには抵抗感はなくなりました。

しかし、英語以外の講義でグループディスカッションを行う際、「オンにできる人はオンにして」といった希望制のことが多く、顔がお互いに見えた方が話が弾むことは分かっていても希望制となると顔出しするタイミングが掴めず、あまり会話が盛り上がらなかったのは残念だと思いました。

オンライン授業ゆえの苦労

授業時間前ギリギリにＰＣを起動しようとすると前日に充電し忘れで電源が落ちていて授業に数分遅れることが何度かありました。

また、Ｚｏｏｍでグループディスカッションを行う際に盛り上がっているタイミングで突然全体のルームに戻される、ということがありました。反対に「ミーティングがあと１分で終了します」という表示が出た時は、話しても途中で会話が途切れる可能性があるので積極的に会話ができずに気まずい沈黙の時間があったので、話の終わり際のタイミングを図ることが難しいと感じました。

課題に関しては全てオンライン上で管理ができるので、基本的に出し忘れることはありませんでした。

大学に行けるようになったらしたいこと

実際に対面で講義を受けてみたいです。今年度は全ての講義がオンラインだったため、少人数の言語系科目以外は全体で何人が受講しているのか、何年生がいるのかすら不明な授業が多かったため、対面で受けることで様々な学年や留学生などの国籍、文化が違う人とも交流がしたいと思います。

授業
インタビュー
2

社会学科 1年 中村丹音 さん

オンライン授業の感想

私はオンライン授業を受講してみて、やはり対面式の講義の方がいいなと感じました。なぜなら、1年生だったのにも関わらずクラスメイトに会うことが1度もなく、大学生らしい生活を送ることが叶わなかったからです。オンライン授業でカメラをONにする機会もしばしばありましたが、その時間だけの関係みたいになってしまい、そこから友達に発展することが中々難しく寂しさを感じていました。唯一オンライン授業の良いところを挙げるとするならば、大人数の対面授業だと難しい、小グループを作って行うディスカッションが、オンライン授業だとブレイクアウトルームで簡単にできることです。人と話すことが本当に好きなので、これだけは嬉しかったなと思います。

オンライン授業で最初にカメラをオンにしないといけなかったのは、どのタイミングか。また、その時の心境や抵抗感など

授業によってまちまちでした。言語系科目の際には始めからカメラONを求められました。その一方で他の講義では、ブレイクアウトルームに分かれてディスカッションをしなければならない時に、カメラONを求められることが多かったです。ですが、私自身は自分の顔を出すことに抵抗はありませんでした。なぜなら、対面で会えなくてもオンライン授業で顔を出して授業を受講することで、「1人ではなく、みんなと一緒に授業を受けられている」という実感が湧いたし、何より人と関わることが好きなのでオンライン上でも顔を出して交流できることへの嬉しさが勝ったからです。

オンライン授業ゆえの苦労や失敗談

オンライン授業こその悩みは、生活習慣がかなり乱れてしまったことです。本来の対面授業があれば、学校に通学するまでの時間などを考えて、規則正しく生活をせざるを得ません。ですが、オンライン授業は家で受講できる分、実際に学校に行くよりも授業のギリギリまでダラダラすることができてしまいますし、運動時間も減ります。私自身も以前に比べてダラダラする時間がかなり増えてしまったり、授業が1限にない日の前日は夜更かしして、翌日起床時間が遅くなってしまったりするということがありました。実は、今も生活習慣の改善ができておらず、1度狂ってしまった生活習慣は中々元には戻せないことを痛感しています。

大学に来られるようになったら行ってみたい学内の施設

私が大学に行けるようになったら一番行きたい場所は学食です。自分の大学にも関わらず、私は1度も学食に行ったことがありません。なので、通学ができるようになったら学食で友人とご飯を食べながら、色々な話で盛り上がることができたらいいなと思っています。今年こそは、大学に行きたいです。

Column 1

学内のコロナ対策

換気中の教室

大教室の入口には消毒液が設置され、換気のため基本的にドアは常時開放することとなった。

閉鎖された喫煙所

学内の喫煙所は密空間となるため大多数が閉鎖され、タバコを吸うことが以前より難しくなっている。

検温ステーション

学内では入構時の検温に加え、無人の検温ステーションがいくつか設置されている。

使用停止中の給水器

給水機の他に学食のウォーターサーバーも使用できず、飲み物は自動販売機かローソンで買うしか無い。

2

interview

コロナ禍での就活

人と会うのに抵抗を感じる時代。
大きく変わりつつある就活の「今」を、インタビューしました。

就活
インタビュー
1

メディア社会学科 4年 山田瑞季さん

コロナ禍の就活で良かったこと

説明会や面接などは、対面でなくオンラインが中心だったため、会場への移動時間などを考える必要がなく、効率よく多くの説明会や面接の予定を組むことができたところが良かったです。面接も、自分の部屋でできることで企業に行って面接官に囲まれて話をするという状況よりは、ある程度落ち着いて臨むことができたと思います。また、去年までは、1次面接・2次面接までは集団面接だったという企業が、今年はオンラインなので1次面接から個人面接に変更したという企業も多くあり、面接中に周りと比べたりせずにのびのびと話せたと思います。

コロナ禍の就活で得たテクニックなどやっておいて良かったことやしておいた方がいいこと

私は、絶対に伝えたい言葉や志望動機などはポストイットに書いてパソコンのカメラの近くに貼っておきました。それをしたことで、緊張して頭が真っ白になってしまい伝えたかったことを度忘れしても、何とか立て直すことができました。ただ、あまりにたくさん書きだしたり、長い文章を貼っておくと、それを言わなきゃと気が散ってしまったり、目線がいろんなところに移ってしまうので、どうしても言いたいことだけを短く簡潔に書いておくぐらいにとどめておいた方がいいと思いました。

オンライン面接で企業に良く見せるために工夫した点

少しでも自分の表情が明るく見えるように、パソコンの両サイドにライトを置きました。ある企業の座談会で、オンライン面接のときにあまりにも顔が暗く映っていると話している内容に限らず、どうしても暗い印象が残ってしまうと企業の方が

話していました。ですので、画面に明るく映るようにすることは特に大切だと思います。あとは、パソコンの下にティッシュの箱などを置いて、少し位置を高くすることで首が下に曲がって姿勢が悪く見えないようにしました。また、背景に余計なものがうつらないように面接のときは、棚などを白いカーテンで隠してきれいに見えるようにしました。

気分転換をすることが難しい状況下で就活中の息抜きになったこと

友達と連絡をすることが一番の息抜きになりました。私は就活中、就活の予定以外で外出することが全くなくなりました。そんな中で、気づいたら最近言葉を交わした相手は面接官と家族だけみたいな状況になり、気持ちが沈んでいくことが増えていきました。そんなときは、おんなじ状況で頑張っている大学の同期や地元の友達と電話やラインをして気分転換をしていました。就活をしている友達と常に連絡を取ることは、息抜きにもなるし情報交換にもなるので大切だと思います。

オンラインと現地での面接の比率

オンライン8：2現地

就活に役立ったアプリや掲示板

ビズリーチキャンパス・リクナビ・マイナビ

就活
インタビュー
2

メディア社会学科 4年 平野亜海さん

コロナ禍の就活で良かったこと

説明会や面接を、1日に何箇所も受けられた事が一番よかったと思っています。多い日では面接を3つ受けました。説明会はライブ配信のほか、オンデマンド配信があり、自分の都合に合わせて説明会の視聴ができました。そのため、他社選考と予定が重なることはあまりありませんでした。また、コロナ禍で暇な時間が多くあり、他にやることがなかった環境は就活に集中できるため逆によかったです。授業もオンラインであり、就活との兼ね合いを考えると、私はオンラインでよかったと思っています。

コロナ禍の就活で得たテクニックなど やっておいて良かったことやしておいた方がいいこと、もしくはコロナ禍のインターンシップの現状について

面接前には、説明会を何度も視聴し、疑問点をまとめることで逆質問対策を万全にしました。インターンシップには参加していないのであまり現状は知りませんが、中止になった人も多くいると聞きました。OB訪問は1回もしていないですが、オンラインでもサービスがあるそうです。時間がある人はやっておくといいと思います。友達とオンラインで面接練習をしておくと安心かもしれないです。オンライン面接になって、1次から受からないことが多かったですが、場数を踏み面接慣れすることで、受かるところが増えていきました。

オンライン面接で企業によく見せるために工夫した点

自分の部屋が暗いため、LEDライトを活用し、自分の顔がよく見えるようにしました。また、ハイライトやシェーディングを使用し、普段よりも化粧をしっかり目にすることで顔の印象がよく見えるようにしていました。パソコンの位置も事前に

調節しておくと、楽な姿勢で面接を受けることができると思います。シャツの襟にはしっかりとアイロンかけて、清潔感を出していました。

就活の軸や企業を選ぶ際に注目した点など コロナの影響で変化した点は

コロナ禍に対応せず、オンライン活用をしていない会社は時代遅れという認識があり、避けるようにしていました。また、もともとIT企業を志望していたのですがより一層志望度が増しました。逆質問でコロナ禍への対応を質問して、社員のことをどう考えている企業なのかを判断していました。

合同説明会や就活イベントが少ない中で どのように最新の就活情報を集めたか

マイナビやリクナビなど、就活情報サイトが基本でした。業界から絞り、気になった企業があればとりあえず説明会に参加していました。人に会うことが全くなかったため、友人やOB訪問からの情報収集は全くしませんでした。

気分転換することが難しい状況下で 就活中の息抜きになったこと

毎朝ランニングをすることで、気分転換できていました。あとはネットショッピングで服や小物を大量購入して、届くのを楽しみに就活を頑張っていました。

オンラインと現地での面接の比率

8:2くらいです。最終面接のみ現地で行う企業が何社かありました。

就活に役立ったアプリや掲示板

リクナビ、マイナビ、就活会議

就活
インタビュー
3

メディア社会学科　4年　齋藤まな さん

私は就職先の会社から昨年3月末に内定をいただいたため、就職活動自体には新型コロナウイルスの影響を受けませんでした。そのため、就職活動を終え、内定者として感じた影響について記します。

内定が決まってからの約1年間は入社に向け、会社側が様々なイベントを用意してくれています。懇親会や食事会、先輩社員への質問会、入社手続きなどはコロナ禍以前なら対面で開催されるはずのものですが、それらは全てオンライン形式に変更されました。同期には昨年10月の内定式で初めて会うことができ、とても嬉しかったのですがそれが直接会えた最後となっています。その内定式はもちろん終始マスク着用で、座席も大きく距離が保たれているコロナ禍仕様だったので、周りの内定者と満足な会話もできないという状況でした。

内定が決まり無事に社会人になれるという安心感があった一方で、心細さを感じるときもあります。一緒に入社し、これから同じ会社で頑張っていく関係性であろう同期とほとんど直接関われていないからです。学生の皆さんも授業などで重々承知だと思いますが、大人数のオンライン形式だと表面上のさらっとした会話で終わってしまい、特定の人と仲良くなるのはなかなか難しいですよね。顔と名前は何となく分かるけど、趣味や大学時代の活動といったパーソナルな情報は誰についても詳しく知りません。すでに社会人として活躍されている大学の先輩からは、悩みを共有したり愚痴り合ったり会社の同期が辛いときの支えになっているという話をよく聞きます。そのため、入社後に予定されている数週間の研修も、対面かオンラインか今のところ定かではありませんが、早く同期に直接会って気軽におしゃべりしたり、仕事に関して励まし合ったりできるようになればいいなと思います。

就活に役立たなかった掲示板

「みん就」などの掲示板はむやみに見ないのが得策だと思います。当てにならない情報に振り回されるのはもったいないです。

Column 2

愛すべき立教の食堂

友達と講義を受けたい。話しながら気兼ねなく食事がしたい。
私たち大学生の日常の中にある幸せを味わうことができなかった2020年。
こんな時こそひとりで、少ない人数で、立教の学食を味わってみませんか？

1 レストラン・アイビー

5号館地下にある【レストラン・アイビー】には焼きたてのパンがいただけるベーカリーが併設されています。講義後のおやつにもぴったり！

2 第一食堂

ハリーポッターのようだと評判の【第一食堂】は高い天井とタイル貼りの床が特徴的。密にならない工夫をして記念撮影もしちゃいましょう！

3 9号館軽食堂

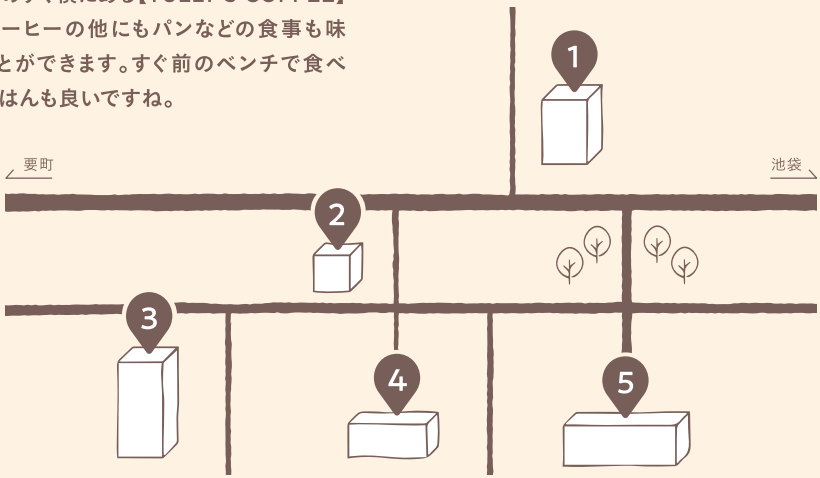
週替わりのメニューが楽しい【9号館軽食堂】は中に売店もあります。テーブルがいくつかに分かれているので少人数での会議にはぴったりかも。

4 カフェテリア山小屋

ラーメンに乗っている海苔にまでこだわる【カフェテリア山小屋】はウィリアムズホール内にあります。意外と穴場なのでゆっくり過ごせそう！

5 TULLY'S COFFEE

図書館のすぐ横にある【TULLY'S COFFEE】ではコーヒーの他にもパンなどの食事も味わうことができます。すぐ前のベンチで食べる外ごはんも良いですね。



3

report

コロナ禍での留学

コロナ禍で様変わりした留学。
それまでの現地滞在から、感染拡大、帰国、隔離、オンライン授業までを時系列で追います。

留学
レポート
1

コロナ禍のイギリス留学

現代文化学科 4年 中村洸太さん

留学先　英国 シェフィールド大学
The University of Sheffield

期間　約6ヶ月間
2019年9月16日～2020年3月28日
（予定2020年6月13日）

留学方法　大学間派遣留学（交換留学）プログラム

2020年3月にCOVID-19の感染拡大により中止されたが、私は2019年9月からイギリスのシェフィールド大学で派遣留学生として社会学を学んでいた。年末に中国で未知のウイルスによる感染者が出たと聞いた時も、2020年に入ってアジア圏で感染が広がりつつあると聞いた時も、イギリスにまで感染が広がるとは思いもよらなかった。その時はまだ、イギリスにいた多くの人々と同様に、他人事と考えていたのだ。

事態が深刻化するまで、私は充実した留学生活を送っていた。大学図書館から徒歩2分の寮に住み、様々な国籍の友人たちとの交流を楽しんでいた。授業は講義とセミナー、ワークショップなどの種類があり、セミナーは講義の内容についてのグループディスカッションが中心で、ワークショップは講義とセミナーの混合のようなかたちで進められた。セミナーでのネイティブの学生の歯切れの良さとノンストップの議論に気後れしたが、徐々に自分の意見に自信を持ち発言できるようになった。いくつかの授業では、12月の総選挙の論点であったイギリスのEU離脱も取り上げられた。離脱の背景を、イギリスで当

2019年の暮れ、街中心部のクリスマスマーケット

事者たちと切実な問題として議論する体験はきわめて刺激的だった。学業のほかにも学内のシアターで映画上映を行うFilm Unitという団体で運営や作品の選定に携わり、上映後には各国の映画好きたちと鑑賞した作品について語り合った。

状況が変わり始めたのは1月31日だ。イギリスで初の感染者が報告された日でもあるが、シェフィールドの地元ニュースサイトでは、大学近くのウエストストリートで起こった事件が大きく報道された。1人の中国系大学院生がマスクを着けていたために歩行者から嫌がらせを受けたのである。毎日のように通っていた大通りで起きた事件に私は強い衝撃を受けた。シェフィールドで過ごしてきた4ヶ月半、多様な背景を持つ人々を受け入れる寛容で平和な街だと身をもって感じてきたからだ。この事件を受けて、私を含めてマスクを着用しないことにした学生は多かった。

3月、ヨーロッパで感染が広がり、街中でもマスクをつける人が増えた。労働環境改善のための教職員のストライキで休止していた授業が再開して間もない頃、NHS（国民保健サービス）への負荷を最低限に抑えるため、できるだけ流行を遅らせるというイギリス政府の方針が明らかになった。ボリス・ジョンソン首相は“Many more families are going to lose loved ones before their time.”とスピーチで語り、ここまで突き放した冷酷なことを言っていいのかと疑問に思った。周囲で危機感が一気に強まったのは、大学職員1名が感染し、感染が疑われる学生もいると大学から通達があった、翌13日金曜日のことだった。シェフィールドに聳え立つアーツタワーという大学の建物の中の11フロアが封鎖され、消毒作業が行われた。16日からの授業は中止、ほどなくイースター休みが前倒しされた。授業再開は4月中旬と告げられ、Film Unitによる定期上映も無期限中止となった。

翌週、政府は、混雑を避け、在宅ワークをするよう呼びかけ、高齢者、妊娠中の女性、既往症のある人には自主隔離を呼びかけはじめた。店頭からはトイレットペーパーやパスタなどが消え、スーパーの宅配サービスも予約が埋まり新規予約ができない状態だった。

3月18日の朝、大学で親しくなったシェフィールド出身の学生と日本人大学院生と共にほぼ貸し切り状態の劇場で映画を楽しみ、日本食レストランで昼食を食べていたところ、立教大学国際センターから緊急帰国を指示するメールが届いた。

3月19日から帰国準備を始めた。その週のうちに帰国した日

本人学生もいたようだが、私は帰国ラッシュを避けて3月28日に帰国することにした。食器や調理器具などは、シェフィールドに学位取得まで滞在する大学院生たちに譲った。

3月23日夜、ボリス・ジョンソン首相がイギリス全土のロックダウンを発表した。大学寮のフラットメイト全員が集まってスピーチを聞く様子は、戦時中にタイムスリップしたかのような気分にさせた。

9月から見てきた活気あるシェフィールドの街はどこかに消えた。パトカーが巡回し、入場制限のかかった食品・生活必需品の販売店を扱う店以外はほとんど営業をやめ、ロックダウン直前まで「コロナに負けない」と張り紙をして通常営業を続けていたパブも閉まっていた。日本へ荷物を送るため訪れた郵便局では、社会的距離を呼びかけるポスターや誘導シールが壁や床に貼られるなど感染対策は徹底されており、イギリスの意外な柔軟さに驚いた。

この頃ネット上で、「イギリスから帰国した大学生の感染を確認」などと居住地や大学名と共に留学生たちの感染を伝える日本のニュースを見た。好きで帰ったわけでもないのに身元を報道されネット上でバッシングを受ける様はあまりに理不尽で、帰国をすることにためらいさえ覚えた。

3月27日の夕方、ロンドンのヒースロー空港へとバスで向かった。予約していたホテルに泊まれないというアクシデントのあと、空港近くのゲストハウスに1泊した。翌朝のターミナルは、入国した時とは見違えるほど閑散としていた。チェックインを受け付けているのは数便のみで、免税店もほぼ閉まっていた。マスクとビニール手袋をしっかりと着用したCAたちに配られた機内食は、個包装されたパンや菓子のみだった。

10時間弱で羽田空港に到着。2時間近く並び、ようやく辿り着いた検疫では、PCR検査があるのかと思いきや、体調を聞かれ、申告書に書かれた項目を口頭で伝えられただけだった。帰国者全員へのPCR検査が始まったのはこの数日後で、感染しているかもしれないという不安な思いを抱えたまま、私は2週間の自主隔離期間を過ごした。

帰国後の4月下旬、シェフィールド大学の授業が再開した。すべてオンラインで行われ、オンデマンドで講義動画が配信されたので、幸いにも時差に悩まされることはほとんどなかった。Race, Immigration, Multiculturalismという授業のセミ

ナーの内容は一部、コロナ禍に合わせたものになった。COVID-19がもたらす人種間の不平等について、死者数はBAME（黒人、アジア人、エスニックマイノリティー）コミュニティに偏っており、それには職種や居住環境などのインターセクショナルな要因が絡んでいるということを学んだ。5月末のレポート試験では、先に述べた人種間の不平等や、コロナ禍で明らかになったグローバル化の負の側面――アジア系への差別、対面で仕事をする必要のあるサービス業従事者の人種的偏り、そしてワクチン・ナショナリズムなど――について書いた。コロナ禍であったからこそ得られた知見があったように思う。

5月末にオンライン授業と試験が終わり、私のシェフィールド大学留学プログラムはすべて終了した。イギリスでは勉学でも交友関係でも充実した留学生活を送っていたが、途中で打ち切りになったことで多くのことをやり残してしまったような残念な気持ちがある。シェフィールドで会った友人たちともっと話したかったし、英語でのディスカッションも慣れるのに精一杯で、全力を出し切れずに終わってしまったような気がする。しかし、現地での生活やオンライン授業を通して、他の年では経験し得ない多くの学びがあったと思う。機会があれば、また留学にチャレンジしたい。

シェフィールド大学のStudents' Union

留学レポート 2

コロナ禍における留学

社会学科 4年 小宮知佳 さん

留学先	米国アーカンソー州立大学 Arkansas State University(以下ASU)
期間	約8ヶ月間 2019年8月12日～2020年3月31日 (予定2020年5月13日)
留学方法	大学間派遣留学(交換留学)プログラム

私は、2020年夏までの予定だった留学生活後半、アメリカでCOVID-19の感染拡大が始まる場面に直面し、早期帰国を余儀無くされるという経験をしました。その留学を振り返って感じたことを、コロナ禍との関係から述べていきたいです。

1 留学概要

ASUのある街は、「ザ・アメリカ南部の田舎」といったような街でした。ほとんど歩道がなく、大きな車道のみで、道沿いには、ウォルマート等の大型スーパーやモールや飲食店等がありました。Jonesboroという街だったのですが、遊びに行くような場所はないため、そこに住む人は「Jonesboring」と呼んでいるほどでしたが、傍らその街への愛を感じました。友人と部屋で会話を楽しむこと、料理を作ること、スポーツを楽しむこと等、どこかへ遊びに行って楽しむというよりも、日々の友達と過ごす時間が幸せに感じたので、私にとって「Jonesboring」のような街はかえって良い場所でした。

キャンパスはとても大きく、敷地面積は立教の池袋キャンパスの約80倍もの広さ(※1)です。夜中の1時まで開いている図書館や、スター

図1 お世話になった図書館

バックス等の飲食店、ワークアウトやスポーツができるジム等の施設があり、非常に充実していました。そのためキャンパス内で過ごす時間が多かったです。留学生は、様々な国からきていましたが、日本人の学生が特別多いという印象は受けませんでした。もちろん、日本人の学生とも交流がありましたが、授業は1人で受けることがほとんどでした。留学生のみでなく、大半の現地生もキャンパス内や、キャンパス付近の寮やアパートに住んでいたので、多くの生徒と交流ができました。留学生用のイベントも多く、韓国や中国、ベトナム、メキシコ、インド等様々な国の友達ができたことは留学の醍醐味だなと思います。

※1 ASU メインキャンパス約3,700,000㎡（ASUホームページ参照）
立教大学 池袋キャンパス約70,000㎡（立教大学「大学基礎データ」参照）

2 コロナ禍での現地生活と早期帰国

COVID-19の流行により、大学で対策が取られ始めたのが3月初旬で、対応のスピードが非常に早かったです。まず、授業が数日間閉鎖され、その後オンライン授業へと移行されました。授業ごとに異なる対応がとられましたが、私の履修していた授業では、ZOOMのアプリを利用してリアルタイムで行う授業や、自己学習を進め課題提出を行う授業がありました。授業に行くことがなくなり、気の緩みを感じてしまう時もありました。学食やジム等あらゆる校内施設においても感染防止対策が徹底され、以前よりは気軽に行くことができなくなりましたが、開いている時は行っていました。3月下旬には、留学生以外は原則実家に帰るよう要請され、キャンパス内が閑散としていったのを覚えています。現地で「コロナ」という言葉が流行り始めた頃、トイレットペーパーや米等の日用品、食料の買い占め現象が起きました。しかし3月中は私のいた州、街ともに感染者数が少なかったため、マスクをつけている人は見かけませんでした。

留学生も自国へ帰る準備をし始めた頃、私は1日でも長く現地に滞在していたいという思いと、無事に帰国できるのかといった不安な気持ちとが相まっていました。他の日本人留学生や家族、大学関係者の方と相談し、結局、3月30日の便を取りました。帰国日が決まり、多くの友人と別れを惜しみ、残りの現地生活を楽しみました。

またこの時期は、就職年度にあたっていた私にとっては、就職活動の本選考が始まる等といったこともあり、なかなか集中できず大変な時期でした。

3 コロナ禍での帰国後生活

日本時間の3月31日に帰国し、2週間は自宅待機生活を送っ

ていましたが、やっと終わろうとしていた時に第1回緊急事態宣言が発令され、結果的に長い自粛生活を送りました。帰国してすぐは、留学先に戻りたいといった留学ミスと、日本の友達に会いに行きたいけれど外出できないということにより、ストレスを感じることも多々ありました。帰国後も引き続きオンライン授業が行われました。当期では（2020年の春学期）授業を5つ履修しており、毎週オンライン授業があるのは1つのみでしたが、アメリカと日本の時差を考慮し、授業参加の有無は任意となりました。その他は、数回オンライン授業が行われることもありましたが、大半のクラスにおいて、課題が出され、期間内に終わらせるといった自主学習型が多かったです。分からない部分は教授にメール等で質問をするという形でした。そのため、時差を考慮しなくとも授業を受けやすい環境であった反面、自主学習になるため、溜め込まないように計画的にやることが必要とされました。また、普段の生活で英語を話す機会が減ってしまったことから、留学は現地に行ってこそだなと実感しました。写真は日本時間朝5時半に参加したクラスの授業最終日のものです。

図2 コロナ禍オンライン授業の様子

5月の初旬に期末試験があったため、試験に向けて勉強をしていきました。それと同時に、就職活動を並行していたため、時間をフル活用し、自粛期間においてもあっという間に時間が過ぎて行くように感じました。

4 留学を通して

COVID-19の流行によって、予定よりも1か月程早い帰国となり、最後まで留学生活を全うしたかったという悔しい気持ちもありますが、私にとってコロナ禍での留学生活、帰国後生活がポジティブに働いた面もありました。それは、就職活動を行っていた私にとっては、選考のほとんどがオンライン上で行われるようになり、日本にいる就活生と同条件で選考に参加することができたことです。私が受けた企業の選考は初めから終わりまで全てオンライン上で行われました。結果的に第1志望であった企業への就職が決まったため、納得のいく就職活動をすることができたと思います。

私は今回、４年次の秋学期から５年次の春学期を休学し留学をしたため、他の日本人留学生よりも年上という立場でした。しかし、他国から来た留学生は、私よりも年上の人も多く、全く気にする必要はありませんでした。就職時期もずれてしまうということ等から、留学をするかどうか迷っていた時期もありましたが、自身の「やりたいこと」を貫くことができて良かったです。私にとって「留学」が学生生活の最大の目標でした。大学関係者の方や家族、友人等多くの人の支えに感謝しています。現在はなにかと制限されている状況ですが、自身の「やりたいこと」を強く持っていて欲しいです。留学であれば、それを叶えるための準備が今できると思います。私も、必ず世界各地の友人に会いに行くという大きな目標ができ、その目標に向かって前向きに頑張っていこうと思っています。

図3 ホームパーティー時の様子

参考ＵＲＬ

立教大学、２０１６年、「大学基礎データ」
２０２１年１月19日取得
https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/evaluation/qo9edr0000007zn5-att/2016_05.pdf

Arkansas State University, "University Profile"
２０２１年１月21日取得
https://www.astate.edu/info/about-asu/

Column 3

編集部員による繋げ作文

コロナとワタシ

コロナ禍でほとんど大学に行かなくなりました。

私はオンライン授業の方が好きです。

通学の時間が無くなり、ギリギリまで寝ています。

家にいる時間が圧倒的に増え、やっぱり家が好き！と思う昨年でした。

今年からは、少しずつ対面での授業が増える予定です。

狭く深い交流の海で、のうのうと泳いでた身なので、友人を増やすことを目標にしたいです。

新学期を間近に控え、今は長期休みで乱れた生活習慣を戻すように頑張っています。

……などという夢を見た。

あれほどまでにメディアに溢れていた「コロナ」という単語を聞かなくなってから、
いったいどれぐらいの月日が経っただろうか。

煩わしくも正月太りを隠してくれていたマスクともおさらばして久しい。

いままでは黒いマスクをしている人を見ると「すっげえな…」と思ったが、そうも感じなくなってきた。

自分でも様々な色のマスクをつけて楽しむようになってきた。

ありきたりで当たり前、普通の毎日が異常に特別なものにと感じられる。

コロナ禍という未曾有の事態によって、私の価値観は大きく変わった。

そして、今後予想外の出来事が降りかかる度に、また人々の価値観は変わってゆくのだろう。

私たちの作る社会学部報は、そんな価値観の変化も反映することができる雑誌に違いない。

価値観の変化は、たいてい事後的にしかわからない。

だからこそ、自分の軸を持った上で柔軟に価値観を変化させることが大切だと考える。

私は今現在も、その軸を持てているのだろうか。コロナ前、コロナ禍、コロナ後、
さまざまなシチュエーションの中で、フレキシブルに形を変えてきた。

4

report

コロナ禍でのゼミ運営

例年以上に工夫が求められた2020年度のゼミ運営。
社会学部の3学科それぞれから、3名の先生に振り返っていただきました。

ゼミ運営レポート

1

研究休暇と「ｗｉｔｈコロナ」の一年を振り返って

メディア社会学科　林怡蓀　教授

まさかコロナウイルス流行の真っ只中に研究休暇を終えるとは、一年前の私には全く想像できませんでした。

２０１９年９月、主宰した国際ジャーナリズム調査のワークショップが終わり、一息つきながら、これから始まる一年間の貴重な研究休暇をどう活かそうかと考えていました。そしてフィールドワーク調査を行うべく、２０２０年１月に台湾行きの計画をたてたのでした。当時既に、中国の武漢で原因不明の肺炎が発生しているとのニュースが世界各地で報道されており、それをどこか遠いところの出来事のように感じながらも、念のためにマスクを着用して１月２０日午後、台北市内の松山国際空港に降り立ちました。到着ロビーで荷物の整理をしていたところ、いきなりテレビ局のクルーに取材の協力を求められました。なんと、その日の武漢からの直行便に台湾の感染者第一号となる人が搭乗していたのです。

その日をきっかけに台湾のテレビは新型コロナ報道一色に染まり、感染者や濃厚接触者が１名増えるたびに、パニックを煽るような報道ぶりが連日繰り返されていました。空港での取材に「手洗い・うがいをしっかりして、マスクも常時着用していれば余計な心配はいらないと思う」と「大人しく」答えた私の映像は、案の定、夜のニュースでは全てカットされ、代わりに４歳の娘が着用したキャラクター模様のマスクがクローズアップされ、３秒間流れました。災害報道でもよく目にするような、いわゆる非日常的な、冷静さを失う人々の姿と語りを、テレビは常に求めていることを実感させられました。当初台湾に２０日間滞在する予定でしたが、感染者第一号が確認された日から台湾全土は厳戒体制に入り、２００３年のＳＡＲＳの苦い経験から人々は余計に神経をとがらせ、社会全体に緊張感が張り詰めていました。数日後、フィールドワーク調査で行く予定だった台湾中部や北部に感染スポットが確認され、更に近々台湾や日本が国境封鎖する可能性が高いという情報も入ったため、苦渋の決断の末、フィールドワーク調査を中断して日本に帰国しました。

1月末に東京に戻ると、とてつもない違和感に包まれました。正体不明のウイルスを封じ込めようと厳重体制を執る台湾社会とは対照的に、いつもと変わらない生活様式と街を行き交う談笑する人々の風景。台湾での様子が夢であったかのような錯覚すら起きました。ところが2月末から状況が一変したのです。武漢からの日本人帰国チャーター機を始め、ダイヤモンド・プリンセス号の集団感染は日本のコロナ時代の幕開けとなりました。保育園の登園自粛によって自宅保育を余儀無くされた私は、計画していた研究スケジュールを幾度も見直しました。結局のところ、海外調査どころか、東京から他県へ移動することすら躊躇し、ステイホームが唯一の行動パターンとなりました。その代わり、自宅での幼い子供との濃密なコミュニケーションを通して、親子にとってかけがえのない幸せな時間を持てたのは救いでしたが、ただ社会や外部との接点で言えば、インターネットでのコミュニケーションにしか頼れない状況の中で、虚無感や不安な気持ちを強く抱いたのは否めません。こうして2020年9月に1年間の研究休暇期間を終え、秋学期から大学に復帰しました。今思えば、私の研究者人生の中で最も奇妙で不思議な研究休暇でした。

秋学期からの復帰当初は、オンライン講義やパソコン機器操作の不慣れで緊張する場面がしばしばありました。録画し忘れたり、マイクがオフのままずっと喋っていたり、共有の画面がなかなか開けずしまいにパソコンがフリーズしたり、Zoomのリンクを間違えて入室したら誰も現れなかったり(汗)…。助けを呼べない状態で冷や汗をかきながら、なんとか克服していかなくてはと焦る日々でした。私の3年ゼミ「専門演習2」と4年ゼミ「卒業論文演習2」はともに対面での開講が叶い、コロナの荒波に揉まれて久しぶりに会ったゼミ生たちの顔には、どこか不安そうな、しかし少しホッとしたようなものがありました。3年ゼミは合宿ができない中で、都内のアイヌ文化交流センター見学や、制作会社のディレクター、通信社の新聞記者による対面レクチャーを通して、同じ空間の中で互いの発言のニュアンスを汲み取りながら、ディスカッションの場を作り出していく実感が少し取り戻せたように思います。一方4年ゼミは年末に卒業論文の提出を控えていることを考え、集団接触のリスクを減らすために個別指導に力を入れていました。教員と学生双方の体調や時間に合わせて、柔軟にオンラインと対面を使いこなし、時には夜遅い時間までオンライン指導にも及びましたが、場所を選ばず画面を通して1対1の指導に集中できる点は、むしろオンラインならではの利点であるように思います。

1年次「基礎演習」はオンライン形式に終始しての開講でしたが、このクラスは自己管理力とコミット能力の高い14名の学生に恵まれており、文献調査からグループ調査のテーマ設定まで、真剣に事前リサーチを行なった上でのゼミ参加が多く見受けられました。毎回のブレイクアウトルームでのディスカッションは、それぞれ個性あふれるスタイルで意見や雑談を交わし、得意／不得意な部分を補いながら作業を進めていく姿が確認できました。Ｚｏｏｍの画面に大きく映し出された一人一人の顔と表情や語調の変化は、正直、これほど近距離で学生を観察したことのなかった私にとって新鮮そのものであり、互いに「真っ正面から向き合う」ことを強く意識させられた体験でもあったように思います。秋学期末には緊急事態宣言の２度目の発出により、ナマで集まることは断念せざるを得ませんでしたが、全員が対面にも劣らない質の高い最終発表を無事に終えられて安心しました。

振り返ると、授業を行う際の一番大きな挑戦はやはり感染予防対策とメンタルサポートでした。呪文のように手洗い・消毒・うがいの徹底を繰り返しても、やはり感染しない保証はどこにもありません。感染のリスクは誰にでも付きまといますが、しかしそれによって互いに疑心暗鬼になり、分裂や孤立が発生することはどうしても避けたいと強く思いました。感染者と濃厚接触者へのバッシングや自己責任論の押し付けが横行しやすい社会的雰囲気の中で、皆が安心でき、結束する力を持たせる言葉を十分に届けられているか、自省の日々でした。

コロナを経て世界がどのように変わるのでしょうか。「新しい生活様式」を構築する機会としてポジティブに捉えられる面ももちろんあります、しかし1年以上も続くコロナ禍ではすでに多くの貧困や格差、さらに差別問題が露呈し、激化しています。弱者を適切に救済し、そして新たな弱者を生み出さないために、大きな社会的仕組みと意識の変換が求められていると切実に感じているこの頃です。

ゼミ運営レポート

2

私たちと他者の生を再発見するためのプロジェクト

現代文化学科　小泉元宏　准教授

このパンデミックのなかで、大学はどのような社会的な場所としての意味を示すことができるのだろうか。フィジカルな接触が制限され、オンラインを通じた活動に組み替えることを余儀なくされた状況において、一人ひとりの主観性はどのような状況に置かれており、それらを交わらせることにはいかなる課題、そして可能性があるのだろうか。

感染症対策を理由に、理性的な行動を訴えながら進められてきたロックダウン（日本ではロックダウン的「空気」とも言い換えられる）が強行される状況がはらむ暴力性と不条理が、我々の日常を徹底的に抑圧する状況に対して、リベラル、あるいは左派の論者たちのなかには強い不満をぶちまけるものもいる。ジョルジョ・アガンベンは、強力な感染症対策とそれに付随する行動制限がはじまったころ、次のように書き殴っている。「コロナウイルス由来のエピデミックとされるものに対する緊急措置は、熱に浮かされた、非合理的な、まったくいわれのないものである」と。彼のような不満を、パンデミック当初のウィルス特性の不透明性がゆえに起こった集団的な感情的神経症に対する、現実性を無視した過剰反応だったと批判するのは容易い。しかし、アガンベンが、ともすると不器用な態度とともに呼び掛けようとしたのは、人々が自らの生を守るために、生そのものを押しつぶしてしまうような過剰な制御社会的行為の傾向、いわばアポトーシスの暴走のような状況に対して、自身の精神的自由を確保し、生の領域を守ることを訴えるためだったと考えるのは不自然ではないだろう。

けれども私たちは、アガンベンの呼びかけへの返答として、ソーシャル・ディスタンシングを拒否するために大規模なレイヴ・パーティを開いたり、マスクの科学的有用性を批判したり、陰謀論であるとＳＦ映画のように決めつけたりするのとは違った方法で応え、人間性を擁護することができるはずだ。少なくとも、私たちのゼミナールが主題のひとつとして掲げているはずのアートの領域は、権力や制度への抵抗運動の代替行為としてのみ必要とされているのではない。人々や社会の可能

性を広げるための、あるいは問題を投げかけるための、ありうる多様な視点を拡散するためのものであるはずだ。

オンライン・クラスと、実地でのフィールド・リサーチ、研究発表などを交えながら、今年度のゼミで私がゼミ生たちと試みようとしたのは、制限された社会状況下における人間関係の交叉の可能性を試すことだった。五感のうちの3つの感覚が拘束されたなかで、互いの存在を十全に理解し、社会の複雑性やリアリティを識ることは容易でないが、それでも私たちは、他者の物語に耳を傾け、新たな気付きの断片を拾い上げ、想像力を通じて思考を深めることを通じて、自らと、自らの周りの「現われ」を見つけ出し、活動の場を広げることができるのではないか。

２０２０年度の小泉ゼミは、私が春学期まで海外研究期間に入っていたため、ゼミ運営を毛利嘉孝氏が担当してはじまったのだが、そこで提示された一連のオンライン文献講読が、このような問いを発展させるきっかけとなった。毛利氏は、まず、新型コロナウィルスの拡大を受けて特集が組まれた『現代思想』（現代思想２０２０年５月号 緊急特集＝感染／パンデミック）から、ジャン＝リュック・ナンシーの論考「あまりに人間的なウイルス」や、スラヴォイ・ジジェク「監視と処罰ですか？いいですねー、お願いしまーす！」などのエッセイを読んだり、日本ポピュラー音楽学会（ＪＡＳＰＭ）が行った緊急調査の記事を通じたディスカッションなどを行ったりしていた。これらは、ほかに毛利氏が取り上げた『平成時代』（吉見俊哉著、岩波新書）や、『ニック・ランドと新反動主義』（木澤佐登志著、星海社新書）などとともに、学生たちが、自らがいま、いかなる時代のなかに生きているのかを探っていくためのきっかけとなった。それを受けて担当を引き継いだ私は、夏～秋ごろには、すでに学生たちのあいだに、他者との交わりを希望する声と、大学に長時間来ることへの抵抗の感覚が両義的に、しかも拮抗するようにして存在していることを感じながら、ゼミを進めることになった（それらの声と感覚が、今年度の私のゼミ運営の原点となっている）。

そこで、横浜（ヨコハマトリエンナーレ２０２０）

写真1 秋葉原フィールドワークの一場面より

や秋葉原（秋葉原各所やアーツ千代田３３３１）といった場所での希望者参加によるゲストトークやフィールドワーク（写真１）などの実地での活動とともに私が取り入れたのは、オンラインを通じたアートプロジェクトの実施や、オンラインによる文献講読・研究発表でのグループワークやピアレビューの積極的実施、あるいは、鳥取大学地域学部や社会的企業うかぶＬＬＣと連携し、一部卒業生らの参加も交えながら行ったオンライン研究発表会やオンラインまちあるきなどだった（写真２）。これらはその多くが、自身の生と他者のそれとを交錯させたり、異なる主観性を持つ人々の共存とぶつかり合いから生まれる可能性を模索していったりするために導入したものである。たとえば、アートプロジェクトとして提示したのは、Learning To Love You More / Revisit というオンライン・プロジェクトだった。これはもとも

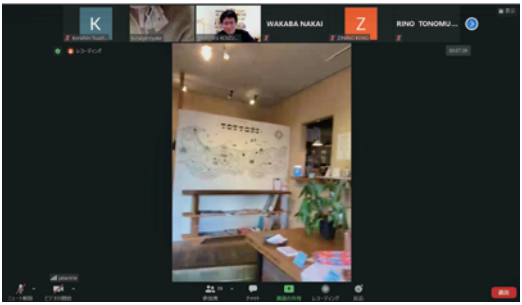


写真２ にんげん研究会大会のようす（鳥取大学地域学部、合同会社うかぶとの共催）

と、ハレル・フレッチャーとミランダ・ジュライが２００２年から２００９年にかけて行ったウェブベースのプロジェクト（Learning To Love You More, learningtoloveyoumore.comにて閲覧可）がベースとなっている。フレッチャーとジュライのプロジェクトは、彼らがウェブ上で提示するアサインメントを参加者が行い、そのプロジェクト遂行のようすを参加者たちがウェブ上のプラットフォームに投稿していく、というシンプルな協働型のパブリックアート、あるいはソーシャリー・エンゲージド・アートだった。その課題は、「日常の出来事に関する記事を書くこと」だったり、「誰かに、その人が欲しているかもしれない電話をかけること」だったり、あるいは、「戦争を経験した人にインタビューすること」だったりする。いずれも、自らの生や体験に結びつく課題となっているのが特徴である。このプロジェクトを２０２０年、私たちは改めて再訪・再考（Revisit）したのだ。まず、学部生・院生を含めたグループごとに、フレッチャーたちのアサインメントを遂行して、その状況を互いに報告、発表する。その後、参加者たち自らがアサインメントを出題して、他のグループがその課題に取り組み、その様子をプレゼンテーションする、といった形でプロジェクトは進んでいった（写真３）。ある学生は、「初めはどのようにやっていけばよいのかわからず手探りでアサイメント

写真3 Learning To Love You More / Revisitプロジェクトより。
アサインメント内容は「傷を写真に撮り、それについて記述すること」(Photograph a scar and write about it.)」。このゼミ生は2歳ぐらいの頃、生まれて初めて家族写真を撮る前に、庭で転んでこの傷を負ったのだという。

をこなして」いた、という。だが、「終わって振り返ってみると[…]自分自身だけでなくアサイメントを通して他の人の感じ方や物事に関する見方なども知ることができて、互いにパーソナルな部分をあえて晒すことで他者の存在を意識するということにも繋がっているのかな」と、感じたと振り返っている。

他者を知ること、その考えを丁寧に聞くことは、私たちの社会の存立にとって本質的な所作であることは言うまでもない。しかし私たちは、動画配信サービスやテレビに映し出されるリアリティーショーを通じてかりそめの生を消費するのに夢中であるのにもかかわらず、自らや身近な他者の生の物語を振り返ったり、触れようとしたりする機会を持つことがきわめて限られてしまっている。にもかかわらず、他者による自らへの理解不足や、他者の行動の不可解さについて嘆くのだ。そのような行為の蓄積が生みだした社会的分断の状況が、アメリカやヨーロッパ、そして日本でも２０１０年代顕著に拡がり続け、そしてパンデミック下においてもはっきりと露呈しているように思われるいま、それを変えるための一歩を、私たちは模索していく必要があるはずだ。このゼミを通じて得た小さな、しかし、その人を構築するかけがえのない物語に触れたことをきっかけに、今後さらにゼミ生たちが、インターネットを通じた「人間の拡張」の先で出会うことができた他者の生に関心を持ちながら、もっと話したい、議論したい、何かやってみたいと感じてくれることを願っている。

ゼミ運営レポート 3

怒濤のように過ぎ去った一年を振り返る

社会学科 吉澤夏子 教授

昨年三月六日、一九年度最後の教授会が終わり、「しばらく外出できないから」と髪を切りに表参道に寄って慌ただしく家路に着いたことを鮮明に覚えている。思えばあっという間の一年だった。この間、今年二月の入試業務まで一回しか大学に来ないという「完全引きこもり生活」をつづけ、仕事は自宅からすべてリモートで行なった。立教での教員生活最後の年が初めての経験の連続となり、「いったい何の因果でこんなことに〜」と嘆くことしきりだったが、メディアセンターの指導を仰ぎ何とかオンライン環境を整え、さしたるトラブルもなく初夏を迎えるころになると、当初の戸惑いや不安も解消し、「どこでもドア」状態のあまりの快適さに、コロナ以後の世界の「可能性」という社会学的な問題設定に思いを馳せる余裕もでてきた。

春学期に2・3・4年、大学院の4つの「演習」を担当し、まず感じたことは、往復2時間の通勤時間がゼロということがこれほど効率的・合理的、そして「快適」なのか、ということだった。木曜日には2・3・4時限と3つのゼミがあるが、いつもなら朝家を出る時間にパソコンの前に座ると、授業開始まで2時間近く時間がある。Meetの設定、カメラやマイクの調子など何度も確認し、その日の予定をシミュレーションしながら、報告予定の学生のレジュメにゆっくりと目を通し、入念に授業の準備をすることができる。時々、夕方5時に一日の授業が終了し、5分後にはキッチンに立って食事の準備をしていることに、それが当たり前の日常と化していることに、ハッと我に返り驚くことがあった。ぐったりして家に帰り着き、ばたばたと家事に追われることもない、「こんなことってある？・・・凄い！」と、リモート・ワークの「有り難さ」に思いをいたすことも多かった。

ゼミ運営の内実についてはどうか。まず欠席・遅刻が明らかに少なくなり、授業で使用する文献・資料・レジュメ等を担当者・受講者が予めブラックボードにアップすることで、何かを「待つ時間」がほとんどゼロとなったこと、誰かが来るのを待つ、何かが終わるのを待つというそのちょっとした時間の無駄

がなくなったことのメリットは大きい。4つの演習とも例年の対面形式とほとんど同じ内容・スケジュールで行なったのだが、途中5分ほどの休みを入れても緊張感を最後まで途切らせることなく、100分の時間をフル活用し結果としてゆとりある充実したゼミを行なうことができた。

ゼミでもっとも重要な「議論」についても、対面のときと遜色のない質が保たれ、全体としてスムースに進んだと思う。一般にオンラインだと発言が難しいという声もあるが、積極的な学生は上手にタイミングをはかって活発に発言していたし、全員の表情をフラットに見わたすことができるので、発言を躊躇している学生に対して私から適宜声をかけることも簡単にできた。さらに例年の3・4年ゼミでは行なったことのないグループ・ワークを初めて経験し、オンラインならではの効率性・機能性に「こんなに便利なのか」と感心した。学生同士の交流を少しでも促したいという明確な目的もあったが、即座にグループに分かれて同時に議論に入り時間がくれば全体クラスに戻るというオンラインのフットワークの良さには正直感激してしまった。ゼミの雰囲気に緩急をつけ、その後の全体議論を盛り上げるうえでも役立ったと思う。

また、何よりも画面上で教員と学生が一対一で向き合っているという状態は、ゼミを行なううえでとても大きなメリットではないかと感じた。一人ひとりの学生と教員の距離が等間隔で平等・公正な感じがしたからだ。授業のルールとして、報告やコメントなど自分が発言する時と全体の議論の時にはなるべく画面をオンにするよう指示していたものの、ずっとオフにしていて授業中一回も顔を見せない学生もいた。それでもゼミ員一人ひとりに対して「同じように」接しているという感覚が、対面のときよりも強くあったのは意外だった。秋学期には講義科目も担当したが、受講者数がどんなに多くなっても、私語「問題」や教室の「空気」に煩わされることなく授業に専念でき、リアクション・ペーパーの整理やチェックなどもブラックボード上の機能を駆使して楽に行なうことができた。多人数の講義科目については(そして会議や委員会、研究会などについても)、オンラインのメリットは議論の余地がないと思われる。

ただゼミ運営――そして大学生活全般――に関しては、大きなデメリットとして指摘されていることがある。この点について最後に触れておきたい。言い尽くされたことではあるが、人と人とのコミュニケーションにおける「余白」の消滅は、いまのところ私たちにある種の寂しさや欠落感を与えている。大学という空間においては、授業の時間ではなくその「前後の」時

間、何をすることもなくふっと「空いた」時間は、けっして無駄な時間ではなく、逆に、そこから思いもよらない豊かな関係性が生まれるかもしれない、そうした可能性に満ちた貴重な時間かもしれないからだ。そうした考えを捨て去ってしまうほど、私たちはまだこうしたオンライン状況に慣れてはいない。しかし一方で、これは社会の大きな変化の過渡期にあらわれた一時的な現象にすぎない、と考えることもできる。私たちが「余白」だと感じるものは単に消滅するのではなく、またどこか別の場所に装いを新たにあらわれ、同じ機能を果たすようになるかもしれない。手紙が電話に、電話がメールにとって代わられ、親密性の編成の仕方に変化が生じても、私たちにとって何か決定的なものが失われたというわけではなかった。いや失われたとしても、それを私たちは「変化」として受けとめたのだ。

この「コロナ禍」という状況は、コミュニケーションの苦手な人々にある種の解放感をもたらし、その「生きづらさ」の感覚を軽減しているとも聞く。このことは現代社会におけるコミュニケーション「能力」の偏重・過大評価を見直すきっかけになるかもしれない。だからこそ、この状況が学生一人ひとりの人生の重要な時期である「学生時代」にどのような影響を与えるのか、またゼミに特化していえば「一つの空間」をリアルに共有することでしか成立しない「議論」のかたちというものがあるのかどうか、は慎重に見極める必要があるだろう。

怒濤のように過ぎ去った一年を振り返り、いま思うことは「今年定年で本当によかった〜！」ということだ。リモート・ワークの快適さや楽しさにすっかり慣れてしまって、もうもとには戻れないような気がするからだ。

編集後記

メディア社会学科3年　日出恵輔（編集長）

社会学部報第4号をお届けいたします。

コロナ禍は私たちに、大学という空間のあり方を再考するよう促しました。２０２０年度はほとんど全ての授業・実習・留学・課外活動・就職活動・インターンがオンラインで実施されましたが、その「オンライン」の受け止め方は年次によって大きく異なるでしょう。既存のコミュニティの上にオンライン性を構築した2年生以上の学生と、ゼロからそれを構築するよう求められた1年生とでは、大学空間への関わりの濃度に差が生まれるのは至極当然です。そうした状況下の1年生の声をはじめとして、コロナ禍における社会学部生のさまざまな活動と工夫を取材しました。

さて私自身の話をさせて頂きますと、多くの授業では毎回、終了後に感想・疑問点を「リアクション・ペーパー」に書いて提出することが求められます。対面授業では、たいてい授業時間が残り少なくなった段階で書くよう指示されますが、オンライン授業では、授業後すぐの提出は求められず、当日の23:59や翌日のお昼など、ある程度時間を置いてから書くことができました。この間が私にとって重要で、少し時間を空けることで、普段よりも疑問点がはっきりしたり、これまで自分が学んできた内容と、新たに得た知識の接点がより明確になったりしました。これをお読みの学生のみなさんは、どうお考えですか。

小泉元宏（社会学部報編集委員会委員長）

今号の編集は、コロナ禍のため２０２０年度春学期はまったく作業ができなかった、という特殊状況からスタートしました。当初は、多くの関係者が「今回の出版は無理だろう」と考えていましたが、水上学部長による「コロナ禍の学部状況を取り上げる機会を設けてはどうか」といった提案を契機に再検討した結果、昨年来のすべての編集部員の賛同・参加を得て、なんとか編集開始に漕ぎ着きました。

編集作業は、すべての工程をオンラインのみで行ったわけですが、取材対象者のみなさまのご協力に加え、就活や卒業のタイミングが重なったにも関わらず尽力した3、4年生、記事のまとめやデザイン立案に当たった2年生含め、編集部のみなさんの努力とボランタリーな意識のおかげで、次々と記事が完成していきました。タイトなスケジュールのなかで、新たにデザイン制作を担当してくださった、うかぶＬＬＣの加藤さん、三宅さんにも本当にお世話になりました。

自発性と努力、協力のうえに成り立った本誌が、コロナ禍が残していく正負の経験を、次の世代、コミュニティに引き継いでいくための一助となることを心から願っています。

社会学部報 第四号 2021（新型コロナウイルス感染症特別号）

2021年4月28日

編集長　日出 恵輔

取材・執筆　岩坂 なのは
大澤 崇仁
杉山 奈緒子
藤井 望愛
山本 彩水
吉原 優人
（五十音順）

写真撮影　齋藤 陽大

編集協力　うかぶLLC

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
立教大学社会学部 学部報編集委員会 監修

RIKKYO UNIVERSITY
MDCCCLXXIV